

『十牛図』と「十分に機能する人間」(ロジャーズ)の 教育哲学的一考察

An Educational Philosophical Investigation of “Ten Ox-Herding Pictures” and the Fully Functioning Person (Carl Ransom Rogers)

広岡 義之*

Yoshiyuki HIROOKA

<要旨>

In this paper, I would like to compare “Ten Ox-Herding Pictures” which is originally a textbook of Zen Buddhism and “the Fully Functioning Person”(Carl Ransom Rogers). Both show the process of self-actualization and the journey to self-actualization. I try to clarify the common theme and differences. Comparing with two thoughts, I would like to examine the meaning of the real self and the need for self-actualization.

本論の目的は、禅のテキストである『十牛図』と、カール・ロジャーズの「十分に機能する人間」とを比較検討することである。両者ともに、人間の自己実現のプロセスを示しており、自己実現の旅を明示している。その共通点と相違点を浮き彫りにしたい。両者を比較検討することで、真の自己の在り方の意味や自己実現の必要性について検討することが主目的となる。

Key Words : 十牛図, ロジャーズ, 自己実現, 十分に機能する人間, 禅, 実存的な性質.

第1節 問題の所在

●『十牛図』も人間の自己実現のプロセスを示しており、ロジャーズの「十分に機能する人間」と比較検討することが可能

『十牛図』は、中国北宋の末、12世紀で成立した禅宗の文献である。禅宗は文字通り、禅(座禅)を修業方法とする教えであり、起源はインドにある。『十牛図』の図柄と頌(じゆ)〔=詩〕は、廓庵禪師(かくあんぜんじ)の作である。序は総序(全体のまえがき)とともに、彼の弟子の慈遠(じおん)の作とされている。日本では室町時代に成立して、広く知れ渡った。(上田、2002:8)

中野ホフマン理見によれば、人間性心理学の立場にあるロジャーズの「十分に機能する人間」とは次のような考え方に基づくという。すなわち、自己実現の欲求過程はすべての人間に開かれており、その実現が可能であるというものである。そして禅のテキストである『十牛図』もまた同様に、人間の自己実現のプロセスを示しており、ロジャーズの「十分に機能する人間」と比較検討することが可能であると、中野は強調している。(中野、2015:92) ちな

みに中野は、彼の論文のなかで、京都相国寺所蔵の伝周文筆『十牛図』を使用している。筆者もまた原則として京都相国寺所蔵の伝周文筆『十牛図』を前提として論を進めることにする。実際の絵図は、中村茂作の模写絵を使用している。

●ロジャーズと『十牛図』の両者ともに、自己実現のプロセスそのものを生きることを目指している

それでは両者にとって「真の自己」とはなにか。ロジャーズの「十分に機能する人間」では、真の自己とは「自己が真にあるがままの自己である」と規定されている。そしてまた『十牛図』では、「真の自己」になるプロセスを十枚の絵で説明しようとする。両者を比較することで、真の自己の在り方や自己実現のプロセスの本質を検討することが中野の論考によって以下で試みられている。『十牛図』は、一言で言えば、「悟れば仏になれるが、迷えば凡夫にもなる」という人間理解をしている。ロジャーズのクライエント中心療法でも、クライエントを独立の人格として尊重し、信頼を示して、理解と受容で関わることで、不適応者であっても肯定的な方向に

* 本学大学院教育学専攻教授

「動き出す」ことが可能であると把握されている。ロジャーズは、人間には元来、動く「性質」があると理解している。(中野、2015:93)

『十牛図』では、それぞれの段階で、人がなにかに気づくことの重要性が示唆されている。この「気づき」を通して、自己の経験と葛藤から真理への自覚が与えられるようになる。一方、ロジャーズの自己実現のプロセスでも、自己に対する気づきや葛藤と並行して、自己構造や認識が変化していくなかでこの「気づき」があるという。そして当該者がそれをそのまま受け入れるとき、人は新たな展開をしていく。それゆえ、ロジャーズと『十牛図』の両者ともに、自己実現のプロセスそのものを生きることを目指していると言えるだろう。しかしまた両者の相違点としては以下のことが指摘できよう。中野によれば、『十牛図』では、いずれの過程でも一人で葛藤しながら、当面する課題を解決していく形態をとっている。禅の修行という本質から考えても、一人で問題と向き合い、自らの内から湧き出るものを体験することを重視する結果だろう。他方、ロジャーズの自己実現の過程では、クライアントの主観的で自発的な体験を重視するものの、あくまでもセラピストの態度がクライアントに与える影響は強く、セラピーの場が大前提となっている。(中野、2015:94)

●クライアントの示す態度の十の変化と『十牛図』の関連性

また瀬古は、カール・ロジャーズの論文「自己が真の自己自身であるということ」(訳によって「自己が真にあるがままの自己であるということ」)を援用しつつ、クライアントの示す態度の十の変化を以下のようにまとめている。①見せかけのものから離れる ②“べき”から離れる ③期待に沿うことをしなくなる ④他者を喜ばすことから離れる ⑤自己の方向に向かう(って) ⑥過程的な存在に向かう ⑦複雑さに向かう(って) ⑧経験に対して開かれるようになる ⑨他者を受け入れるようになる ⑩自己を信頼するようになる ⑪一般的な方向(まとめ)

これらは11番目のまとめの項目を除外すると、10の全体がセラピーの進展に合わされる形で配列されており、そして奇しくも『十牛図』の進展と軌を一にする部分が多い。(瀬古、1987:87)

瀬古は、彼の論文では天理図書館蔵五山版「五味禅」所収十牛図を使用している。筆者は、京都相国

寺所蔵の伝周文筆「十牛図」を使用しており、一部、図柄等が異なり、内容の解釈も異なる部分があることをここでは指摘しておきたい。

そこで本稿では、主として、上田閑照、中野ホフマン理見と瀬古康雄の論考を中心に、『十牛図』とロジャーズの思想を比較検討して、その共通点と相違点を浮き彫りにしていきたい。その際、必要に応じて、ロジャーズ自身の著作および諸富祥彦のロジャーズに関する論考も参照にしていく。

第2節 『十牛図』とロジャーズの「7段階プロセス」における比較

『十牛図』における「牧人」と「牛」は、実際には何に相当するのだろうか。牧人は「人」に相当することは明白である。そして牛は、『十牛図』では「真の自己」、そしてロジャーズのプロセスでは「仮面」というメタファー、あるいは「自分で気づいていない自己の在り方」、また「新しい自己への気づきから生じた自己認識」という把握が可能であるという。(中野、2015:96)

それでは実際に『十牛図』の十の円相にしたがってロジャーズの思想を比較検討していきたい。ロジャーズは、彼の論文「自己が真にあるがままの自己であるということ」のなかで、一つのテーマは、自由に機能しているときの「人間に対する信頼」であり、もう一つのテーマは、「満足のいく生活の実存的な性質」であると述べている。(ロジャーズ、2006:152)

第1項 『十牛図』「第一・尋牛」と「ロジャーズ・第一段階」

●「ロジャーズ・第一段階」は、「第一・尋牛」よりも一歩手前に位置することになるので、まだ自己実現の旅に歩み出していない

第一段階は、見失われた「心牛」を尋ね求めるところから始まる。真の自己を求めるということが、真の自己のはじまりでもある。野原のなかで、いかにも何かを探し求めている若者が描かれている。そこで上田閑照は言う。若者は「『なくてはならぬ唯一つのもの』を見失っていることに気づき、驚いて探し求めはじめるが、しかしどこに求むべきか、また求めているものが果して何か、彼にはまだわからない。」(上田、1982:19)

『十牛図』の「第一・尋牛」では、牧人は牛(真の自己)を失ったことに気づき、家郷を離れて牛を



じんぎゆう
「第一・尋牛」

探す旅に出る。また「ロジャーズ・第一段階」では、人が仮面（偽の役割）に気づくことの重要性は提示されているものの、当人はいまだにその仮面に気づいていないので、葛藤は存在していない。それゆえ、「ロジャーズ・第一段階」は、「第一・尋牛」よりも一歩手前に位置することになるので、まだ自己実現の旅に歩み出していないことになる。（図1参照）（中野、2015：96）

また諸富祥彦によれば、「ロジャーズ・第一段階」は、体験が固定的でそこから隔絶されているという。クライアントは、自分についてあまり話したがらず、外的なことがらにしか接触しようとせず、親密な関係はまだ危険であると感じている。自分でも変化したいと思っていない段階である。（諸富、2020：67）

●自分が何でないかを見定める方向へ歩み出す形で次の図へと進んでいく

瀬古は、ロジャーズのいう「①見せかけのものから離れる」とは、自分でないところの自己から躊躇しつつ、恐れを抱きながら遠のいていく傾向であると考えている。自分が何でないかを見定める方向へ歩み出す形で次の図へと進んでいく。これは『十牛図』の「第一・尋牛」と軌を一にする。（瀬古、1987：87-88）

ロジャーズによれば、第一段階で、クライアントは、自分が何に向かっているかまったくわからないときでさえ、彼はあるものから離れつつあるという。そしてそうしているうちに、彼はたとえ否定的であっても自分が何者であるかを知り始めるという。クラ

イエントは、恐れを表現すること自体が、あるがままの自分になっていく過程の一部であることを理解できるようになる。あたかも自分自身であるかのように見せかけた存在であるよりも、クライアントはより自分自身になりつつある。（ロジャーズ、2006：155）

●住み慣れた家から外に出ることを「見知らぬ世界」との出会いと定義づけたボルノー

西村恵信によれば、いくら廊庵が「素晴らしいものがあるのに、家を出ていったい何を求めようとするのか」と批判しても、理想を求めて家を出ることは、人間の歩む方向としてはむしろ正しいことだと指摘している。西村恵信は、ドイツの教育哲学者ボルノーの主著『人間と空間』を詳細に援用して次のようにボルノーの空間論を展開している。『人間と空間』第二章「広い世界」で、ボルノーは次のように考えている。すなわち、人間は狭苦しい空間に住んでいると、それが自分を悩ます圧迫であるように感じ、開放的な「広い世界」へ出ようとする。憧れの対象となる広い世界には具体的な目標というものはないが、解放されたいというあこがれがある。「広さ」には徹底的に「方向がない」ということが含まれる。ボルノーは住み慣れた家から外に出ることを「見知らぬ世界」との出会いと定義づけている。家を出ると、見知らぬものに出会い、慣れたものが揺らぐ「経験」をし、不愉快なよそよそしさを体感する。それにもかかわらず、人間は見知らぬ土地に出かけて何かを学ぼうとする。（西村、2008：29-30）

第2項 『十牛図』「第二・見跡」と「ロジャーズ・第二段階」

●両者の共通項は、自己を見つける手がかりを発見するという点に存する

「第二・見跡」は、道のうえに牛の足跡を見つける段階である。「足跡」は、『十牛図』では、お経、教え、説法を意味する。人間の本当の在り方が「言葉」で示されている。上田によれば、そうした言葉は、「自力が尽きて倒れてしまったところで本当に聞かれる」（上田、2002：34）という。

「第二・見跡」で初めて、牧人は牛の足跡に気づくわけで、「真の自己」を見つける手がかりを発見する段階に入る。「ロジャーズ・第二段階」では、「感情を体験すること」がテーマとなり、そこで人が「未知の自己」を垣間見ることができるようにな



けんせき
「第二・見後」

る。ここで両者の共通項は、自己を見つける手がかりを発見するという点に存すると言える。(図1参照)(中野、2015:96)

諸富によれば、「ロジャーズ・第二段階」は、人が「感情を体験すること」がテーマではあるものの、感情はまだ自分のものではないと感ぜられる。自分の考えは考えでなく、いまだ事実として語られる。(諸富、2020:67-68)

●「②“べき”から離れる」とは、「あるべきである」という強迫的イメージから遠ざかっていくこと

瀬古にしたがえば、ロジャーズの「(用)“べき”から離れる」とは、「**であるべきである」という強迫的イメージから遠ざかっていくことを示している。ここではすぐれた教えの跡は多く存在するが、それらに導かれて進んだ後は、足跡ではなく、「牛そのもの」を探究しなければならないという。目の上にあげれば、牛は現われる気配を示す。(瀬古、1987:88)

ロジャーズによれば、第二段階では、クライアントが自分はいかに「あるべきだ」という強迫的なイメージから遠ざかっていくという。ここでロジャーズは、両親から「私はよくなければならない」という考えをひじょうに根深く取り入れている女性クライアントの事例を紹介している。彼女は常に父親のすべての要求と期待に応じなければならぬと感じていた。しかしそれがあまりに過大なもので、次から次にその要求がやってきてその要求が尽きることがなかったという。クライアントがこうした服従的な状況か

ら離れつつある段階を、ロジャーズは「第二段階」と位置づけている。(ロジャーズ、2006:156)

第3項 『十牛図』「第三・見牛」と「ロジャーズ・第三段階」

●「第三・見牛」で「真の自己」を具体的に一瞬だけではあるが発見する段階に入る

「第三・見牛」では、牛がいた、ということで見つけた牛に向かって牧童が駆け出している。具体的な見聞覚知においては、身体全体が動き出していくのである。「第二・見跡」では、言葉で理解したことが、今度は身体で理解することになる。見牛では、牧人は駆けていく牛の後半身のみを見ているにすぎない。牛は逃げるように駆けていき、牧人は逃がすまいと懸命に追いかけているという状況である。(上田、2002:84)



けんぎゅう
「第三・見牛」

京都相国寺蔵の伝周文筆「第三・見牛」では、私たちは、牛の尻尾と後足だけを見つけ出すことになる。これの意味するところは、「真の自己」を具体的に一瞬だけではあるが発見する段階に入るということである。別言すれば、それは人(私たち)の感覚器官を精一杯使って活動することの重要性を意味する。他方、「ロジャーズ・第三段階」は、体験の流れのなかに、ある型や根本的な秩序が存在することを発見する段階である。(図1参照)(中野、2015:96)

●「ロジャーズ・第三段階」では仮面の背後に何が存在するのか、より具体的に探究され始める

第三段階では仮面の背後に何が存在するのか、より具体的に探究され始める段階であると、中野は鋭く指摘している。牛という存在を「仮面の背後にある何か」と解釈することで、両者のプロセスはきわめて共通項が多くなる。(中野、2015:96)

諸富によれば、「ロジャーズ・第三段階」では、自分自身について語り始められるが、現在ではなく、まだ過去の感情が多く語られる。自分自身についての考え、すなわちクライアントの「構成概念」が、外的事実としてでなく、自分の中で構成されたものとして意識され始めるという。(諸富、2020:68) また瀬古にしたがえば、ロジャーズはセラピーの進展を「火期待に沿うことをしなくなる」と表現している。「真の自己」とは「社会的自己」である。他者を投影せずに、内側から生動してくるものが生かされねばならない。(瀬古、1987:88)

●同調圧力があるにもかかわらず、クライアントは自由に自分の道を進み始める

ロジャーズによれば、現代の産業文化のなかでは、組織化された人間として、私たちは否応なく期待される存在を求められるようになっていく。同調性へのこうした圧力があるにもかかわらず、クライアントはまったく自由に自分の道を進むことができるようになる。その結果、一定の型にはめようとする組織や文化の傾向に憤慨したり、問題視するようになる。ロジャーズは、あるクライアントの次の感想を提示している。要約してみよう。そのクライアントは長い間、他の人には意味があったが、彼にはまったく無意味なものに従って生きてきた。しかしそうした生き方はもうたくさんだと考えるようになった。彼もこうして他の人の期待に沿うことをしなくなり、それから離れていくことができるようになった。(ロジャーズ、2006:157)

第4項 『十牛図』「第四・得牛」と「ロジャーズ・第四段階」

●牧人(自己)と「真の自己」(牛)の間には緊張と葛藤が存在しており、まさに自分との戦いが展開されている

牛を求めて長い間山に隠れていた牛の姿を、牧童はようやく見つけることができた。そして力の限りを尽くして牛を捕らえ、手綱(たづな)をつけるこ

とができた。この段階が「第四・得牛」である。絵の中ではようやく牛の全身の姿が描かれる。目的は牛を探し求めることなので、牛を捕らえたら、喜びや安堵感があるはずなのに、そうした記述はない。むしろ、牛には野性味が残り、「気性は荒く、力も強く、なかなか手に負えない。」牛を捕らえたものの、まだどうすればよいのかわからない牧童の戸惑いが「第四・得牛」のテーマとなっている。(佐藤、2005:225-226)



とくぎゅう
「第四・得牛」

「第四・得牛」では、「真の自己」を獲得する段階である。牧人(自己)と「真の自己」(牛)の間は緊張と葛藤が存在しており、まさに自分との戦いが展開されている最中である。それと同時に他者への共感と忍耐も学び始める段階となる。「ロジャーズ・第四段階」では、人は物事をありのままに受け入れ始める。そして、新しい自分を防御したり無視することを断念し始める。中野によれば、この段階で、人は「体験に開かれる」状態になるので、自己と体験の不一致についての関心と恐れを同時に抱くことになるという。よって、「ロジャーズ・第四段階」は「第四・得牛」よりも少し先に位置すると考えられる。(図1参照)(中野、2015:97)

諸富によれば、「ロジャーズ・第四段階」では、自分が構成していた考えがじょじょに緩和されてきて、感情が流れ出すようになるという。今ここでの感情を体験する方向に進みつつあるが、そうなることに恐怖も抱いている。親密な関係はまだ危険であると感じられるものの、危険をおかして感情のレベルで他者に関わろうと努力し始める。(諸富、2020:

68-69)

●円相の中にある牛と牧人の争いは、じつは生命(真の自己)と自我の融合の過程である

瀬古にしたがえば、「第四・得牛」で円相のなかに牛が描かれたからには、今度は牛の方が動きださねばならないと鋭く指摘している。ここでは牛と人が主従を争う場面である。野生と見なされていた牛(無意識の自己)は情動の赴くままに山野を駆け巡っていた。しかし、「第四・得牛」において、牛を牽きつつ牛に牽かれるようにして、緊張関係の中ではあるが、百花繚乱の美しい世界に連れ出されるという側面も包含されていると瀬古は理解している。自分の中の無意識のものが外に連れ出されることには不安も感じられる。牧人(私=クライアント)にとって、真の自己自身は「悪は破壊的である」という警戒心があるのに対して、しかしロジャーズは、「汝自身に誠実であれ」と答えている。ロジャーズは「わたしはとうとう、自分のやりたいと思ったことをやりはじめなければならないと率直に感じました」というクライアントの言葉を引用しつつ、「④他者を喜ばすことから離れる」ということが「信頼に値する過程」であると確信している。ドイツに『十牛図』を紹介した辻村公一が、「第四・得牛」の特徴を「根源的生命と日常生活とを調和せしめること」と解釈していると瀬古は指摘している。円相の中にある牛と牧人の争いは、じつは生命(真の自己)と自我の融合の過程であるという解釈である。(瀬古、1987: 88-89)

●「④他者を喜ばすことから離れる」において、「汝自身に誠実であれ」というシェイクスピアの言葉を再発見した

ロジャーズは、「④他者を喜ばすことから離れる」において、多くの人は、他者を喜ばそうとすることによって自己を形成しているが、彼らが自由になったとき、そこから離れていくという。ロジャーズはある男性クライアントのことを紹介している。要約してみよう。彼は、いつも自分が期待されていることをしなくてはならないと感じて生きていた。これからは、ただ自分自身でありたいと思う。彼は、「汝自身に誠実であれ」というシェイクスピアの言葉を再発見したという。(ロジャーズ、2006: 157-158)

第5項 『十牛図』「第五・牧牛」と「ロジャーズ・第五段階」

●「第五・牧牛」の段階は「ロジャーズ・第四段階・第五段階」の両方に当てはまる

「第三・見牛」「第四・得牛」「第五・牧牛」は、自分の本当の在り方が、自分自身のうえで次第に成熟していく段階である。(上田、2002: 119)「第五・牧牛」では、わざわざ手綱で拘束しなくとも、自ずから牛が人についてきている図柄になっている。牛飼いの後から牛が付いて行っている状態の図柄である。手綱はすでに緩んでおり、逃げて行きはしまいか心配して手綱を引っ張るといふ緊張関係が溶解している。綱はついているが、自ずから牛飼いと牛が共に歩調を合わせて同じ方向に向かって進んでいる。(上田、2002: 122)

「第五・牧牛」では、牧人と牛は統一され、次第になごんでいる雰囲気を感じる。牧人が牛に先立って同じ方向に向かって歩いている図である。ここで初めて牛の顔を私たちは見ることができるようになる。分裂を経験した牧人は、手綱を離さないが、綱はすでに緩んでいる。「第四・得牛」のような緊張的統一ではなく、二つが一つとなり、自然になりつつある。(上田、1982: 27)



ほくぎゅう
「第五・牧牛」

「第五・牧牛」では、獲得した牛を飼いならす問題が提起されている。それは、周囲の物事をありのままに受容できる状態であると同時に、悟りの「自己化」を考え始める段階である。「ロジャーズ・第五段階」は「自己の生命体への信頼」が芽生える状態であり、本当の自分でありたいという願望が強くな

る段階である。自分の体験に開かれてくるようになると、自分の生命体が信頼しうるものであると認識できるようになる。よって「第五・牧牛」の段階は「ロジャーズ・第四段階・第五段階」の両方に当てはまる。(図1参照)(中野、2015:97)

諸富によれば、「ロジャーズ・第五段階」では、感情は現在のものとして自由に表現されるようになる。自分の感情は自分のものだという気持ちが強くなり、本当の自分でいたいと願うようになる。そして自分の中で自由な対話が生じてくる。諸富は言う。「この5段階は決定的に重要な段階である。自分の内側にある感じに対して、クライアントは、直接意識をむけながら、ものを考えるようになる。」(諸富、2020:69)

●「第五・牧牛」でもクライアント中心療法でも、覚醒、つまり、十分に気づくことが主題となっている

また瀬古は次のように考える。「第五・牧牛」では、「鞭索(べんさく)[意識のこと]時時、身を離れず」と書き出されている。鞭索とは意識のことであり、牧牛の図は、覚醒、つまり、十分に気づくことが主題となっているという。クライアント中心療法において、意識は「気づいていること(awareness)」と同義語である。ロジャーズは「⑤自己の方向に向かって」という項目で、「自己自身であることの自由というのは驚くほど責任の重い自由なのである。人はこの方向に向かって注意深く、恐れをいだきながら、最初はほとんどまったく自信なしに進んでいく」と述べている。前に進むのは根源的生命としての身体的自己である。そしてその動きに注意深く気づくのが意識的自己である。ここで心身の関係で、主従が逆転して、心の働きは能動から受動へと変化するという。瀬古は、彼の論文では天理図書館蔵五山版「五味禪」所収『十牛図』を使用している。京都相国寺所蔵の伝周文筆『十牛図』では、登場する牛はすべてもともとから同じ色のままで、牛の色は変化しない。しかしながら、天理図書館蔵五山版「五味禪」『十牛図』では、「第三・見牛」と「第四・得牛」では黒い色をしているがしかしこの「第五・牧牛」から、白い牛に変化して、「第六・騎牛帰家」まで白いままである。瀬古によれば、「五味禪」『十牛図』の黒い牛は、「人の無意識」を表して、白に変わることで、人は「意識的自己」に変化するという。私見によれば、白に変わり、「意識的

自己」に変化することで、「実存的な覚醒・めざめ・気づき」が生じるものと思われる。先にクライエント中心療法において、意識は「気づいていること(awareness)」と同義語である、という解説があったことから理解できよう。そして次の「第六・騎牛帰家」では、生命と自我との融和が達成されるのである。(瀬古、1987:89)

ロジャーズは、「(木)自己の方向に向かって(自己指示に向かっていく)」という項目で、クライエントは「自発的であることに向かっていく」という。つまり彼は、じょじょに自分がそこに向かいたい目標を選ぶようになる。どんな活動であっても自分にとって何が意味あるもので、何が無意味なのかを、自分で決めるようになるという。しかしそれは責任の重い自由であり、当初は自信なしに進んでいく。しかしそれは自分の中に激しく沸き立ってくるものであり、自己指示へと向かっていくときに共通して起こる反応であるとロジャーズは鋭く指摘している。(ロジャーズ、2006:158-159)

第6項 『十牛図』「第六・騎牛帰家」と「ロジャーズ・第六段階」

●「第六・騎牛帰家」の段階では自己によって獲得された「真実の自己」に、自己が従う

牧童が牛を牽く「第五・牧牛」では牧童が主体的な役割を果たしていたが、「第六・騎牛帰家」の段階では牧童を背中に乗せて牛が歩む形態なので、「第六・騎牛帰家」では牛が主体的な役割を果たすことになる。牛が、「真実の自己」(牧童)に主体的



きぎゅうきか
「第六・騎牛帰家」

に働きかけ、自分なりの「真実の自己」を獲得するようになる。「第六・騎牛帰家」の段階では、自己によって獲得された「真実の自己」に、自己が従うのである。「第五・牧牛」と「第六・騎牛帰家」では、主従の逆転が見られると佐藤は鋭く指摘している。(佐藤、2005:237～238)

●「ロジャーズ・第六段階」では、「評価の源泉が自分自身にあるということ」を認識できる段階

中野によれば、「第六・騎牛帰家」では、牛を導くあるいは牛に導かれるという観念はもはや存在せず、本来備わっていた「真の自己」が主体となり、牛と牧人が一体化していくという。両者が統一され調和していくことで、未完成であった不安定な自己と本来的自己が、生命の根源的リズムを獲得していく。「ロジャーズ・第六段階」では、「評価の源泉が自分自身にあるということ」を認識できる段階である。自分のある部分を主観的に生きられるようになり、それに伴った生理的解放が存在すると同時に、「体験しつつある瞬間」(in the experiencing moment)の中に自己を置くようになる。あるがままの自己を楽しむことができる状態になるという点では、「第六・騎牛帰家」でも牛に乗って楽しそうに笛を吹き、牛もその音色に相通じているという点で、共通項を有すると考えられる。(図1参照)(中野、2015:97)

諸富によれば、「ロジャーズ・第六段階」では、今ここでの感情が豊かさをもって直接、クライアントに体験される。この段階では、自分の内側にも外側にも問題は存在しない。対象としての自己は消え、自己は感情そのものになる。個人的な構成概念が消えて、固定されていた枠組みから解放される。(諸富、2020:70)

●ロジャーズの「⑥過程的な存在に向かう」という状態は、生まれ出てくる潜在力の過程という存在に向かって生きること

瀬古にしたがえば、「第六・騎牛帰家」では、人は悠々と牛の背中に乗り、牛もまたぶらりぶらりと家路についている。今は心のなかの葛藤はすでに無くなり、無心に歌を歌うだけである。他者から呼びかけられても気にすることはなくなった。ロジャーズは「⑥過程的な存在に向かう」という状態は、「ある固定した目標であるとか、目標になるというよりも、むしろ、生まれ出てくる潜在力の過程とい

う存在に向かって生きること」である。瀬古によれば、それは自分自身が「生成してくる過程」であり、だからこそ、「自分たちは常に同じものではないことに気づいて混乱しなくなる」のである。こうして自己への問いは「第六・騎牛帰家」に象徴されるように、円相は場所的に一巡して、内なる自己へと帰還するのである。(瀬古、1987:90)

●「真に存在する人間は常に生成の過程にある。」(ロジャーズ)

ロジャーズは、第六段階を「過程的であることにむかっていく」と表現している。クライアントは、ある過程や流動性や変化であることに、より開放的に進んでいく。自分は常に一貫しているわけではなく、同じ感情をもっているとは限らない。クライアントは心理療法を受けている間に、自分自身を一つの流動的な過程として理解し始める。そしてその後、生活の中でこれが真実であることに気づいていく。ロジャーズは、「真に実存している人間」について、キルケゴールの思想を援用しつつ次のように紹介している。要約してみよう。真に存在する人間は常に生成の過程にあり、すべてを過程という観点で捉える。実存的な思考は人間それぞれの様式で存在し、しかもその様式については、完結したものはなにもない。(ロジャーズ、2006:159)

第7項 『十牛図』『第七・忘牛存人』と「ロジャーズ・第七段階」

●牧人のなかに牛が消えてしまい、真の意味で、自己と「真の自己」が完全に一致する

「第七・忘牛存人」では、「真の自己」への帰家がテーマとなる。牧人のなかに牛が消えてしまう状態であり、真の意味で、自己と「真の自己」が完全に一致するようになる。前段階まであった牛(「真の自己」という比喩の必要性がここでなくなるということの意味する。「ロジャーズ・第六段階」の「評価の源泉が自分自身にあるということ」が完全に実践されるのはこの「第七・忘牛存人」においてなのである。(図1参照)(中野、2015:98)

ここで「第一・尋牛」の牧童と、「第七・忘牛存人」の牧童とは次元が異なっている点を指摘したい。「第七・忘牛存人」では、牧童と牛が一体となった牧童なのである。(上田、1982:237)佐藤も上田を援用しつつ、人牛一体の徹底として、人のなかへと牛が消えたと理解するのが正しいと指摘している。

その点、柳田聖山は、家に帰れば牛は無用となり、牛が姿を消すのは当然であると、上田と解釈を異にする。しかし、牛が無用になれば、牛によって象徴されている「真実の自己」も無用なものとなり、柳田の解釈に佐藤は疑問を投げかけている。(佐藤、2005: 245)



ほろぎゆうそんにん
「第七・忘牛存人」

●「ロジャーズ・第七段階」は、自分が完成した結果ではなく、実存的な出来事を生成の流れとして受け入れていく最終段階

「ロジャーズ・第七段階」は、最終的に提示される段階で、自分が完成した結果ではなく、実存的な出来事を生成の流れとして受け入れていく最終段階を意味する。自分は固定された実体ではなく、この生成のプロセスそのものであるべく認識される状態なのである。人間は「一定量の特性」ではなく、絶えず変化し続ける「可能性の集合体」なのだということがここで理解されるようになる。しかしながら、この「第七・忘牛存人」では、「ロジャーズ・第七段階」で強調されている「無常の観念」は示されていない。『十牛図』において無常の観念が提示されるのは、「第八・人牛俱忘」を介した「第九・返本還源」の段階であると中野は確信している。(中野、2015: 98)

諸富によれば、「ロジャーズ・第七段階」では、新しい感情がその豊かさを伴って体験される。自分自身のプロセスに対して基本的な信頼がある。自己は対象としてますます認識されることが少なくなる。自分の内側でのコミュニケーションは明確になる。(諸富、2020: 71)

●「最も個人的なものはもっとも普遍的である」(ロジャーズ)

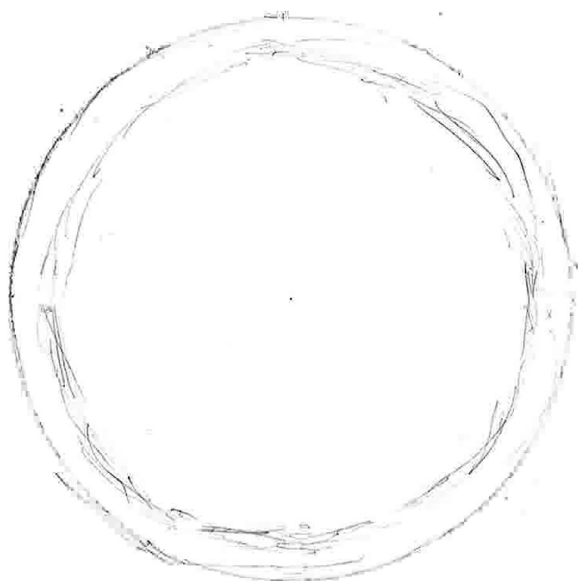
瀬古にしたがえば、「第七・忘牛存人」では、自己一如が真理であるのだが、今までは仮に牛を主題にして説いてきたまでだと明かされる。ロジャーズは、人が自分自身に気づいたときには「⑦ 複雑さに向かって」という歩みを始める。そしてこの段階では、「瞬間瞬間に自分自身のすべてでありたいという願い」が生じるという。私たちの経験の大部分は本人にも意識されていない「感覚的、内臓的感觉」である。経験をこのように把捉すると、それは個人によって経験される以外にはありえない。その意味で、まったく個人的でありながら、ひとたび気づかれればそれはすべての人間に共通するものとなる。ロジャーズはそのことを「最も個人的なものはもっとも普遍的である」と理解している。(瀬古、1987: 90)

ロジャーズは「複雑さに向かって」という第7段階では、クライアントは、過程の複雑さにも向かって変化していくという。クライアントは、その瞬間瞬間に自分自身のすべてでありたいと願うものである。自分には隠すものは一切なく、恐れるものもなにもなく、その豊かさや複雑さのすべてでありたいと、クライアントは共通に持つ願いだとロジャーズは言う。(ロジャーズ、2006: 160)

第8項 『十牛図』「第八・人牛忘」と「ロジャーズ・第八段階」

●「真の自己」さえもすべてが無意味で空虚である

前の段階では、牛の姿が消えていたが、「第八・人牛忘」では、牧童、家、それらを取り巻く自然もすべて消えている。ここでは前段階までのすべてが否定され、飛躍的な展開がみられるという。「真の自己」さえもすべてが無意味で空虚であるという。「真実の自己」を獲得したならば、今度はそれを捨てなければならないのである。なぜなら「真実の自己」を獲得したという驕り高ぶりがでてくるから、というのがその理由である。まさに道元の「自己をならふというは、自己をわするるなり」である。佐藤は河合隼雄を援用しつつ、これを「死の体験」と表現している。この状態は凡夫でも聖者でもなく、仏がいる世界でもなく、二元対立を超越している。(佐藤、2005: 248-249)



じんぎゅうくぼう
「第八・人牛俱忘」

●「第八・人牛忘」の絶対無の状態は、対立を絶するという意味での「絶対」である

中野によれば、「第八・人牛忘」では、円相で表現される「絶対無」の概念が提示される。この絶対無の状態は、対立を絶するという意味での「絶対」であるので、有でもなく無でもないと同時に、有であると同時に無でもある。絶対否定は即絶対肯定を意味する。円相の中には何も描かれていない無の状態であるが、同時にこの中には世界の一切のものが肯定された状態で描かれているとも考えられる。「ロジャーズ・第六・第七段階」の間で、何らかの超越的なプロセスの可能性は考えられるものの、そこにはしかし「第八・人牛忘」に相当するような明確な自己超越の瞬間の段階はない。(中野、2015：98)

●『十牛図』の「自己ならざる自己」に聴き入ろうという態度に変化する段階は、ロジャーズがいう「⑧ 経験に対して開かれるようになる」段階に相当する

瀬古にしたがえば、「第八・人牛忘」は円空相であり、青空だけが晴れ渡り、雲の生ずる気配もないような状態である。瀬古は上田を援用しつつ、「頌」で言われる「從來失せず」とは、じつは牛ではなく、円相であると指摘している。元来、円相の中には何も存在しなかった。本来無一物の「自己ならざる自己」が心身脱落して呼吸をしている。いわゆるこれが「大死一番」という無の場所を通った一大転換である。この段階で「自己ならざる自己」に

聴き入ろうという態度に変化するという。ロジャーズがいう「⑧ 経験に対して開かれるようになる」段階である。クライアントは生活のなかで「体験すること」がおびえるような敵ではないことを体得していく。そして次第に未知のものにも心を開いていくという。ロジャーズは、未知なるものの恐怖に対して、締め出すよりも未知の源に近づくべく、静かに忍耐強く待つことが重要であるという。円空相は「自己ならざる自己」を含む円相である。この円相は自他一如であるから、どのような景色が出現するか、恐れることなく待たねばならないと、瀬古は指摘している。(瀬古、1987：91)

●自己実現する人間は容易に現実近づき、子どものような受容性と自発性を持っている

ロジャーズは、「自己が真にあるがままの自己であるということ」を次のようにも表現している。すなわち、それは自分自身の経験に対して開放的で親密な関係を持って生きていくようになる。ロジャーズはマズローを援用しつつ、次のようにも考えている。自己実現する人間は、容易に現実近づき、子どものような受容性と自発性を持っている。つまり彼らは内側で進行しているものに開かれているだけでなく、外的な現実にも開かれている。その結果、自己実現する人間は、畏怖や喜びや驚きでさえ、人生の基本的素質を繰り返し新鮮に感得できる力を持っているのである。(ロジャーズ、2006：161)

第9項 『十牛図』「第九・返本還源」と「ロジャーズ・第九段階」

●「水は自ら茫々、花は自ら紅」が本源に還った真の自己の姿

「第九・返本還源図」で描かれている絵は、川の流れるとその岸辺に花咲く木だけである。そしてそれが「真の自己」の自然を表現しているのである。(上田、1982：46)

ここでは、人間の内的状態が、外的自然によって比喩的に表現されている。ここでの核心は、「真の自己」についてである。「水は自ら茫々、花は自ら紅」がそのまま、本源に還った真の自己の姿なのである。水が流れ、花が咲くそのこと自体が、ここでは自己の「自己ならざる」事そのものなのであり、自己の無我の遊戯(ゆげ)〔心に任せて自由自在にふるまうこと〕なのである。「自己ならざる自己」は、その無我性において、甦りの身体となる、とは



へんほんかんげん
「第九・返本還源」

上田の言である。(上田、1982: 47)

●「第九・返本還源」に描かれている木や岩自身は「蘇生した自己」でもある

「第九・返本還源」では、無常の世界観が表現されており、自然環境を含めた心身一体の意識が提示されている。ロジャーズの最終段階である第七段階でも「プロセスであろうとすること」が主題となっており、この「第九・返本還源」と共通項を有すると考えられる。(図1参照)「第九・返本還源」の無常の世界観は、「第八・人牛忘」の無我性と一対の関係になっている。すなわち、ありのままの自然を見る目を伴って世界を認識する自己とは「第七・忘牛存人」を介して蘇生した自己である。そしてその自己の在り方が「第九・返本還源」なのである。「第九・返本還源」に描かれている木や岩自身が「蘇生した自己」でもあるという理解である。しかしながらロジャーズの立ち位置は、あくまでも自己が存在する立場であり、「第九・返本還源」に見られるような無我性の概念は存在しないと中野は鋭く指摘している。(中野、2015: 98)

私見によれば、ルドルフ・シュタイナーもまた、人間の意識には、植物や鉱物の記憶が宿っていると主張するが、この「第九・返本還源」の人間理解と深い共通項を有する。この点も今後の課題としたい。

「第九・返本還源」は、「水は自ら茫茫、花は自ら紅なり」、すなわち、窓の外では川がおのずから流れ、花は見せるともなく咲いている。「第九・返本還源」の主題は、移り行く水を見つめつつ、「水

は水である」ということに気づかされる出会いにあるという。「我は我なり」という自己同一性は「我は我ならず」という「無の切込み」にあって、そこから円転して「源に還る」との瀬古の指摘は鋭い。これが「無心の心」と呼称されているのである。(中野、2015: 98)

●『十牛図』では、「無」と背中合わせに存在するのが「自然」で、ロジャーズではそこに「社会(他者)」が存在する

瀬古はまた、『十牛図』にあっては、「無」と背中合わせに存在するのが「自然」である。ロジャーズのクライアント中心療法ではそこに「社会(他者)」が存在する。「(視) 他者を受け入れるようになる」という段階で、クライアントは自分の経験を受け入れるにしたがって、他者の経験も受け入れるようになるという。ここには「自己ならざる自己」の未知性に開かれるようになったクライアントの前向きな姿勢が、さらに「在るところのものに向かっていく受容的な態度」に転換することが暗示されている。あるがままに経験していることがら、自他一如であるという心境が、深い安心感、庇護感をもたらしているとは、瀬古の言である。

別言すれば次のように表現することもできよう。すなわち、『十牛図』で「無の場所」を「孤独」と言い換えると、「我は我なり」というアイデンティティが崩壊した後、ふたたび、「我は我なり」という自己理解を得るために、「孤独」の場所を潜り抜ける必要があるということになる。「第九・返本還源」の円相は自然を描いているものの、私たちは自然にまなごしを向けることによって深いところで「自己を救う」実践をしているのである。(瀬古、1987: 92)

ロジャーズは、「(視) 他者を受け入れるようになる」という段階で、自己実現する人間は、他者に対して開かれており、他者を受容するようになるという。クライアントもまた自分自身の体験を受容することができるようになるにしたがって、他者の体験を受容するようになるという。あるがままの事実に対する受容的な態度こそ、心理療法においてクライアントのなかに育っているものである。(ロジャーズ、2006: 162)

第10項 『十牛図』「第十・入廓垂手」と「ロジャーズ・第十段階」

●第十の段階では、人を教化するという「他覚」の面がでてくる

「ありのままの自然」が示された後、老人と若者が向き合っている。それが最後の「第十・入廓垂手（にってんすいしゅ）」である。この最後の段階は、町の中に入って行って、人々を救済するという慈悲の実践がテーマになっている。すでに「真実の自己」は表現されたが、それは一人の問題として考えられていた「自覚」に過ぎない。第十の段階では、人を教化するという「他覚」の面がでてくる。（佐藤、2005：258-259）

絵に描かれた老人は「真の自己」を実現した人で、牛を探し求めていた牧童になる。牧童が今や老人となって、若者を教化している。それはまさに、死んだようになって人々を目覚めさせ、生き返らせることを意味する。「牧童」が突然現れた老人に説教されているのではないと佐藤は指摘する。（佐藤、2005：259）

入廓垂手（にってんすいしゅ）がまた「尋牛」の契機となる。すなわち、「真実の自己」を獲得した人との出会いによって、「真実の自己」を探し求めるようになる。無だけでは「真実の自己」にはならない。自然と関り人間と関わることによって「真実の自己」が実現されるのである。（佐藤、2005：260-261）



にってんすいしゅ
「第十・入廓垂手」

●「第十・入廓垂手」では、「第八・人牛忘」から蘇生し、「第九・返本還源」をも超越した後の悟りに到った自己の現実的な在り方が表現

「第十・入廓垂手」では、「第八・人牛俱忘」から蘇生し、「第九・返本還源」をも超越した後の悟りに到った自己の現実的な在り方が表現されている。図の中の人物に象徴されているように、自己とは他者との関係性のなかで動的に変化しつつ創造されるのである。「第七・忘牛存人」における自己一致に到達した自己と、「第十・入廓垂手」において描かれている現実社会の中の自己超越した自己は、その在り方において相違点も存在する。ロジャーズとの比較においては、「第七・忘牛存人」における自己一致に相当する自己実現の概念は存在するものの、「第十・入廓垂手」に相当する自己実現の段階はロジャーズの思想には存在しないと中野は考えている。（中野、2015：98）

●「第九・返本還源」の円相（円窓）は、無と表裏一体をなす「虚窓」でもある

瀬古にしたがえば、「第九・返本還源」の円相（円窓）は、無と表裏一体をなす「虚窓」でもあることが示唆されているという。「虚窓」であれば、そこからの出入りが自由自在である。「第十・入廓垂手」では、そのことを受けて、庵から人が街に出ていく図となっている。瀬古はこの図の大人を布袋和尚と把捉するが、上田は、牧人が自己実現した結果の成人と把捉しており、解釈が異なる。いずれにせよ、市井の隠者が、おおらかさの内に、人々を教化済度することが「第十・入廓垂手」の主題である。瀬古は、「第九・返本還源」という在り方のなかに、すでに自己救済の契機が含まれていると解釈している。そして「第十・入廓垂手」における社会的場面でも、教化済度（きょうかさいど）〔ひとを悟りの境地に導くこと〕が主題となっているというのである。他者の呼びかけに応じて、他者を救うことは、ある意味で自己を救うことである。禅の修と証〔禅の修業を修、禅の悟りを証という。修と証は相即不離の関係にある〕は、セラピーの観点からも一体であると瀬古は指摘している。五山版『十牛図』では、大人が一人描かれているだけであるが、廓庵『十牛図』では、大人と童（わらべ）が登場しており、瀬古は、従来の牧牛図と違って、「第十・入廓垂手」の図を加えた廓庵の独自性を指摘している。（瀬古、1987：92）

●「よき画家はこんな風には描かない、しかしわたしはこんな風にする」(エル・グレコ)

瀬古にしたがえば、ロジャーズは「⑩ 自己を信頼するようになる」という項目で、エル・グレコが「よき画家はこんな風には描かない、しかしわたしはこんな風にする」と言っているかのような箇所を紹介している。私見によれば、グレコは、バロック時代の画家で、力動のあるデフォルメをその特徴としていることを自ら語っているものと思われる。ロジャーズはそれをグレコの実存的特徴と捉えている。それとの関連で、クライアントは、セラピーの終盤で、他者ではなく、自分の中に見出した価値によって生き、自分自身の方法で自分自身を表現するように、良い方向に実存的に変化していることを重ね合わせているのだろう。(瀬古、1987：93)

ロジャーズは、ここで、クライアントは自分自身である過程を、より信頼し大切にできるようになるという。ロジャーズ自身、クライアントとかわるうちに、創造的な人間について深く理解するようになったとして、エル・グレコの考え方を紹介している。先の瀬古も触れていたが、エル・グレコはあたかも「よき画家はこんな風には描かない、しかしわたしはこんな風にする」と述べているかのようなのである。さらにロジャーズは続ける。アーネスト・ヘミングウェイは「よい作家はこんな書き方はしない」と確かに気づいていた。しかし彼はよい作家についての他の人の考えではなく、ヘミングウェイである方向へ、すなわち、自分自身であることに向かっていた。ロジャーズはアインシュタインについても同じ表現で繰り返している。最後にロジャーズはまとめとして次のように言う。「クライアントたちは、自分自身の内部で進行している過程をより信頼するようになっていった。自分の気持ちを感じようとするようになり、自分の内側に見出した価値によって生きるようになり、独自の方法で自分自身を表現するようになった。」(ロジャーズ、2006：163)

第3節 まとめ

●人を操作せず、自発的な動きを信じて待つというロジャーズの姿勢はきわめて東洋的である

「ロジャーズ・第六段階」である「評価の源泉が自分自身にある」と感じられる状態は、きわめて重要な節目である。さらに「ロジャーズ・第七段階」の「プロセスであろうとする」状態を自己実現の最終段階としている。中野によれば、ロジャーズの考

え方は、東洋と西洋の橋渡し役を担っているとする。たとえば、人を操作せず、そのままを受け入れて「自発的な動きを信じて待つ」という姿勢はきわめて東洋的であると中野は指摘している。クライアントは「ひとり」で自分自身の内なる声を聴いていく主観的体験を味わわせることが重要であると考えている。この経験を通して、人は真に自分らしい自分になっていく。この「経験」を基本としつつ、自己をみつめるプロセスは『十牛図』の主題でもある「己事究明」ときわめて類似した概念である。(中野、2015：99)

●『十牛図』における自己実現とは、「第十・入麴垂手」が再び「第一・尋牛」へと移行し回転する動的な繰り返しである

中野によれば、「第七・忘牛存人」を介して、大乘仏教の「色即是空 空即是色」に含まれるような「第八・人牛俱忘」と「第九・返本還源」が第一の自己実現の段階である。さらにその自己超越的な境地が現実的レベルとして提示された「第十・入麴垂手」は第二の自己実現の段階と考えられる。「第十・入麴垂手」で示される自己は、現実的な社会における対立を超えた自己という在り方である。その自己は他者と固定的に閉じられたものではなく、相即相入して一如となる状態であり、動的に変化しながら創造されるものでもある。そして「第十・入麴垂手」が再び「第一・尋牛」へと移行していく。『十牛図』における自己実現とは、この回転する動的な繰り返しである。人間存在のプロセス自体が自己実現であるとも言えよう。自己を含めたすべてを捨てることが可能になる究極の意識に到達し、その悟りの後に現実の世界に戻り、さらに原初に立ち返るという考え方は、ロジャーズの自己実現プロセスには存在しないと中野は指摘している。(中野、2015：99)

●『十牛図』とロジャーズのクライアント中心療法は、「深く自己自身に気づく」という点で共通項を有している

瀬古にしたがえば、『十牛図』とロジャーズのクライアント中心療法は、「深く自己自身に気づく」という点で共通項を有しているという。そのための方法として、ともに人間の経験の源泉から学ぶという手法をとる。『十牛図』の円環的な構造は、真の経験が自他一如であることを示唆している。他方でロジャーズのセラピー論では、個人の経験がまず存

在し、他者との関わりに気づかされていくことによって、自他一如へと普遍化されるという。そこで経験することは、すべての人間に共通した身体的自己であるという。(瀬古、1987:93)

己実現の道』、岩崎学術出版社、152～168頁。

●個人は存在 (being) へ、すなわち、内的にかつ実際にそれである過程に向かって、意識的かつ受容的に変化していく

ロジャーズは、「一般的な方向」において、クライアントの変化のパターンにおいて、個人は存在 (being) へ、すなわち、内的にかつ実際にそれである過程に向かって、意識的かつ受容的に変化していくと結論づけた。かれはもはや大げさな防衛を行いながら、実際の自分以上であろうとはしなくなる。また罪悪感等をもちながらも自分以下であろうともしない。彼は自分の情動的存在のもっとも深い部分に耳を傾けるようになる。そして「本当にあるがままの自分であるということ」、これはどのような方向にも進んでいい自由が与えられている場合、最も高く価値づけられた人生の道なのであるとロジャーズは述べている。(ロジャーズ、2006:163)

<参考文献>

- * 上田閑照・柳田聖山 (1982) 『十牛図 --- 自己の現象学 ---』、筑摩書房。
- * 上田閑照 (2002) 『十牛図を歩む --- 真の自己への道 ---』、大法輪閣。
- * 佐藤裕之 (2005) 『仏教と<十牛図> --- 自己をみつめる ---』、角川書店。
- * 瀬古康雄 (1987) 「十牛図とクライアント中心療法 --- 禅とサイコセラピーの比較研究 ---」、島根女子短期大学紀要、25 巻、83～94 頁。
- * 中野ホフマン理見 (2015) 「『十牛図』と C. R. ロジャーズ: 己事究明と On Becoming a Person の概念における自己実現プロセスの比較研究」、人間学研究論集、4 号 91～101 頁。
- * 西村恵信 (2008) 『十牛図 --- もう一つの読み方 ---』、禅文化研究所。
- * 諸富祥彦 (2020) 『カール・ロジャーズ カウンセリングの原点』、角川選書、角川書店。
- * ロジャーズ、諸富祥彦他訳 (2006) 第八章「自己が真にあるがままの自己であるということ --- 人間の目標に関するある心理療法家の考え ---」、『ロジャーズ主要著作集3 ロジャーズが語る自

中野ホフマン理見 著 95 頁より引用

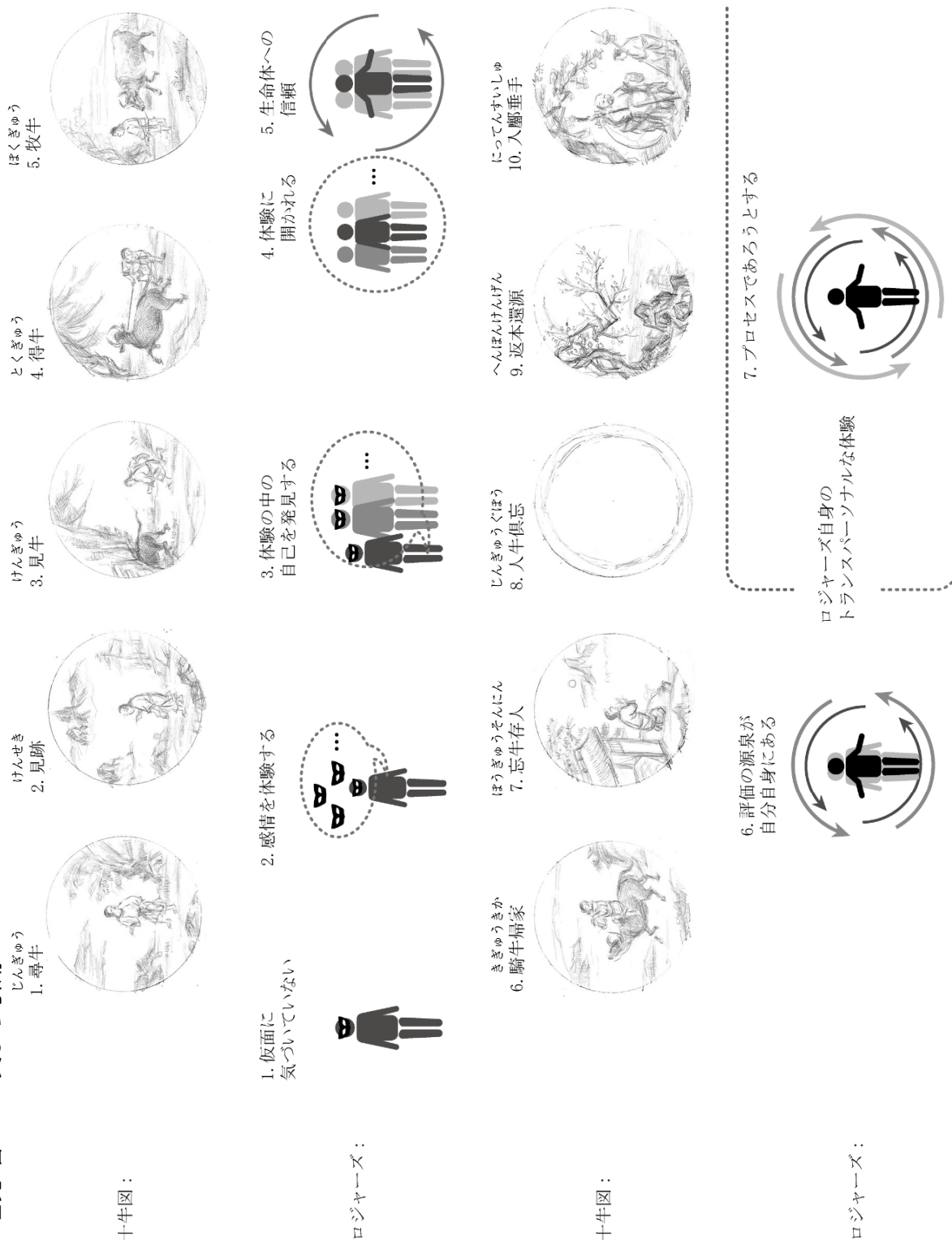


図 1： 郎庵『十牛図』とロジャーズにおける自己表現プロセスの比較

『十牛図』 模写絵 元・示現会会員 中村 茂 作 オリジナルは京都相国寺蔵の伝周文筆「十牛図」である。



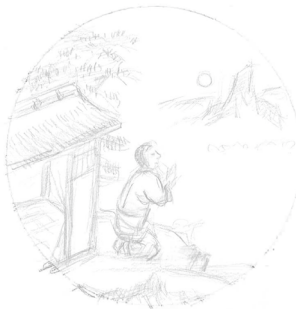
第一・^{じんぎゆう}尋牛



第六・^{きぎゆうきか}騎牛帰家



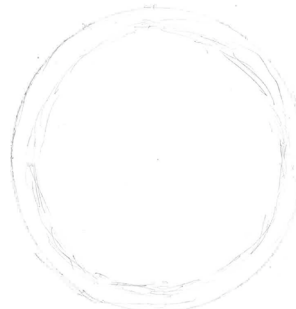
第二・^{けんせき}見後



第七・^{ほうぎゆうそんにん}忘牛存人



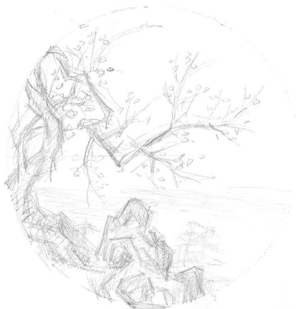
第三・^{けんぎゆう}見牛



第八・^{じんぎゆうくほう}人牛俱忘



第四・^{とくぎゆう}得牛



第九・^{へんぼんかんげん}返本還源



第五・^{ぼくぎゆう}牧牛



第十・^{にってんすいしゆ}入廬垂手